

アメリカ公演(第14次海外演奏旅行)の成果を発表する
三時間コンサート!!

Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第一〇四回◆定期演奏会

1988年6月21日(火) PM5:30開演
朝日生命ホール

主催=日本音楽集団・現代邦楽協議会
後援=ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)

トワイライト・スノー (1986年)

ジュン・フィリップス 作曲

[笙] ジュン・フィリップス [琵琶] 田原 順子
[尺 八] 坂田 誠山

たそがれ時に降っていた雪が心に深く残り、それを思っ書きました。
この曲を書く少し前にインド音楽の演奏会を聴く機会があり、その影響を強く受けました。

タンブーラの替わりに笙を使ったり、即興演奏を取り入れたこと、リズムやピッチ（音程）の順番にもそれが表われています。

（グループ・インテグラル委嘱作品）

RYOANJI 竜安寺 (1983年)

ジョン・ケージ 作曲

[笛] 竹井 誠 [打楽器] 黒坂 昇

私はまず、キタ・サラバイなどインドの音楽家達と親密な交際を始めました。彼女からもらった本を読み、禅の教えを書いたものが一番印象に残りました。当時、幸運にもコロンビア大学で禅の講義を二年間続けて聞くことができたのです。以来、日本を数回訪れました。一度は鎌倉、その次は京都の竜安寺でした。

この曲は石のまわりの小石を熊手でかくように、五線譜の上を“かき”ました。左から右へ書かないといけないので、石のまわりをぐるっと回るようにには書けませんが、石の輪郭の一部を書くことはできました。その輪郭を横軸の「時間」と縦軸の「ピッチ（音程）」に配置したのです。秒さざみで滑べるような音とは対照的に打楽器の音を使い、庭の大きな石と敷きつめた小石の対照的な様子を表わしています。笛が15個の石の輪郭を奏で、それに対照的な打楽器の音は少なくとも私の感覚では小石を表現しています。

——ニューヨークにおける「6時間マラソン
コンサート」でのインタビューから抜粋——

協奏組曲 (1984年)

ディヴィッド・ローブ 作曲

[笛] 藤崎 重康 [十七絃] 宮越 圭子
[尺 八] 坂田 誠山、米澤 浩 [打楽器] 高橋 明邦、望月太喜之丞
[十三絃箏] 花房はるえ [指揮] 田村 拓男
[二十絃箏] 大島菜穂子

篠笛と和楽器合奏団のための『協奏組曲』を1984年に日本音楽集団のために作りました。第一楽章はプロローグの感じで、次に三拍子の叙情的な舞曲、その後には打楽器を使っている民謡的な舞曲、最後にエピソードのような物があって、第一楽章の反響が聞こえます。

この曲は篠笛協奏的な物のシリーズの一つで、1982年に『霧響』を作り（初演を自分で吹いて）1984年に『森翕』。両方のために西洋弦楽オーケストラを入れて、『協奏組曲』だけは和楽器合奏団のために作った曲です。

（ディヴィッド・ローブ）

序の曲 (1969年)

三木 稔 作曲

[尺 八] 坂田 誠山

[二十絃箏] 木村 玲子

[太棹三味線] 坂井 敏子

[弦楽合奏] 新日本フィルハーモニー交響楽団弦楽アンサンブル

邦楽における伝統的な三曲合奏と、近代西欧世界たる弦楽アンサンブルとの協奏で、従来の伝統を断った作曲家独自の発言がなされています。

この作品に続く、「破の曲」(1974年)、「急の曲」(1981年)をもって「鳳凰三連」が形成されますが、この曲は、いわばその前奏曲です。

楽器編成は長管尺八、二十絃箏、太棹三味線、及び弦5部です。

楽市七座 (1988年) — 日本初演 —

和田 薫 作曲

[笛] 竹 井 誠

[打 楽 器] 高橋 明邦、黒坂 昇

マイケル・ウドーとミシガン・パーカッション・アンサンブル

この作品は、1987年ミシガン大学音楽協会の委嘱により、ミシガン・パーカッション・アンサンブルと邦楽器のために作曲されました。曲は、日本と西洋音楽の接点というより、むしろ日本の伝統芸能を素材とし、その領域で各奏者にそれぞれ即興的な“見せ場”を提供し、洋の東西を日本音楽を軸に対流的にあつかっています。

初演は、1988年アメリカ・アンアーバーでおこなわれ、次いでデトロイト、ニューヨーク各地で演奏されました。

尚、この作品は、親愛なる友人でもあるマイケル・ウドー氏に捧げられています。

(和田 薫)

弥勒効果 (1987年) — 日本初演 —

吉松 隆 作曲

ミュージック・フロム・ジャパン + 日本音楽集団共同委嘱作品

[弦楽合奏] 新日本フィルハーモニー交響楽団弦楽アンサンブル

[笛] 竹 井 誠

[箏 I] 花房はるえ

[尺 八 I] 坂田 誠山

[箏 II] 木村 玲子

[尺 八 II] 藤崎 重康

[十 七 絃] 宮越 圭子

[尺 八 III] 米澤 浩

[打 楽 器] 尾崎 太一、黒坂 昇

[細棹三味線] 野口美恵子

[指 揮] 田村 拓男

[琵琶] 田原 順子

弥勒によせる邦楽器群と弦楽合奏のための雅歌。

1. 風切^{かざり} 2. 花笑^{はなえ}み 3. 舞^うひ人

弥勒は、釈迦の入滅後56億7千万年後に地上に降り立ち、世界を救済するといわれる仏。マイトレイヤ「慈から生まれたもの」と呼ばれる。

彼は、私たちの生と死とを、ただ静かに見守っている。そして、生成し消えて行くすべてのものたちのために微笑む。

私の音も、そんな弥勒の穏やかな微笑みの前で生まれ、そして消えてゆく。

(吉松 隆)

凸(とつ)(1970年)

三木 稔 作曲

[笛] 竹 井 誠
[尺八(高音)] 坂 田 誠 山
[尺八(低音)] 米 澤 浩
[細棹三味線] 野口美恵子
[太棹三味線] 坂 井 敏 子

[琵琶] 田 原 順 子
[十三絃箏] 花房はるえ
[二十絃箏] 木 村 玲 子
[十 七 絃] 宮 越 圭 子
[指 揮] 田 村 拓 男

人を喰った名前ですが、内外で大変人気のある作品です。各楽器がさまざまな応答の仕方をします。個性の強い日本の楽器の特徴を生かして、伝統的でありながら極めて現代的、冥想的かと思えば血の湧き立つリズムが延々と続くといった不思議な曲です。指揮者が途中から打楽器奏者を兼ねるアンサンブル方式も、新鮮な着想といわれています。

日本コロムビアの委嘱で作曲、同年初録音、翌71年に日本音楽集団第13回定期演奏会で初演されました。楽器編成は第一群に尺八高音、十三絃箏、太棹三味線、第二群に能管、二十絃箏、琵琶、第三群に細棹三味線、十七絃、尺八低音です。

大津絵幻想(1981年)

長沢勝俊 作曲

[笛] 竹 井 誠
[尺 八 I] 坂 田 誠 山
[尺 八 II] 藤 崎 重 康
[尺 八 III] 米 澤 浩
[胡 弓] 哇 地 慶 司
[細棹三味線] 野口美恵子
[太棹三味線] 坂 井 敏 子

[琵琶] 田 原 順 子
[十三絃箏] 花房はるえ、熊沢栄利子
[二十絃箏] 木 村 玲 子、佐藤由香里
[十 七 絃] 宮 越 圭 子、大島菜穂子
[打 楽 器] 尾 崎 太 一、望月太喜之丞
[指 揮] 田 村 拓 男

「大津絵」とは、江戸時代に近江国(今の滋賀県)大津の追分あたりで売られていたおみやげ用の民衆絵画のことです。それは、当時の民衆の哀歓や世相風刺が泥絵具でユーモラスなタッチでおおらかに画かれており、全国津々浦々にまで広がり親しまれていました。大津絵を深く愛していた柳宗悦氏はこの美しさについて、それはどこまでも民衆から出る美しさであり、民衆ならではの産み得ないものだとして述べており、その無銘な世界から来る大津絵の美を鋭く指摘しています。

この作品は、大津絵の中から五つを選び、その奥深くにひそむ民衆の誇らない自然の姿と智恵と余裕を、日本楽器の音に託して表現しようと試みられています。

楽器協力：ジャパン・パーカッション・センター ヤマハ(株)管・教育楽器事業部

和田薫「楽市七座」においてミシガン・パーカッション・アンサンブルが使用する楽器は、表記2社の提供協力を得たものです。

衣装協力：東レ株式会社

この演奏会で女性演奏者が着用している衣装は、「東レ・シルックきもの」で、アメリカ公演のために生地提供をうけたものです。

■マイケル・ウドーとミシガン・パーカッション・アンサンブル

マイケル・ウドー氏は、20世紀の打楽器界において、指導的な役割を果たしているアメリカの打楽器奏者。彼は、ソロ・パーカッショニストとして東京のインターリンク・フェスティバル、ドイツのライン音楽祭をはじめとして多くの海外ツアーも行ってきた。

ニュー・オリンズ・フィルハーモニーの打楽器奏者、歴史的な打楽器合奏団「ブラックアース・パーカッション・グループ」や革新舞踏との共演など、打楽器奏者として幅広く多彩な経歴を持っている。

現在もミシガン・パーカッション・アンサンブルの主宰、サンタ・フェ・オペラやサンタ・フェ室内合奏団での演奏活動のかたわら作曲にも精力的に取り組んでおり、彼の作品はスカラ座の打楽器奏者達やシンシナティ・パーカッション・グループ、そして自らのアンサンブルによって日本のNHKを含む各国のラジオ放送で紹介された。彼自身もCRI、アドバンス・レコードなどで多くのレコードを録音している。

マイケル・ウドー率いるミシガン・パーカッション・アンサンブルは、ワシントンDCにおけるP.A.S. (打楽器芸術協会) の25周年記念コンサートなどを含む一流の音楽大会で高い評価をうけてきた。この若くエネルギー溢れる合奏団は、1986年に、名マリimba奏者安倍圭子と共に日本の作曲家の作品によるいくつかのコンサートをアメリカ国内で行ない、1988年にはリンカーン・センターにおいて日本音楽集団と共演するなど、音楽を通じて日本との文化交流に大きな役割を果たしている。

■新日本フィルハーモニー交響楽団弦楽アンサンブル

新日本フィルハーモニー交響楽団は、1972年、自主運営のオーケストラとして発足。指揮者団に小澤征爾、朝比奈隆、山本直純、小泉和裕、手塚幸紀を擁し、90名の楽団員によって現在年間160回を越える演奏会を行っている。

楽団の顔となる定期演奏会は今年160回を越え、東京の数あるオーケストラ中、最も意欲的かつ斬新なプログラミングを誇っており、多くのリスナーの支持によって、ここ数年来売り切れの状態が続いている。

1974年と85年にヨーロッパとアメリカに演奏旅行を行う。

■吉松 隆

1953、東京に生まれる。1972、松村禎三氏に師事。1974、慶応義塾大学を中退。ロック、ジャズ、邦楽のグループなどに参加。音楽の放浪生活を送る。1980、交響楽振興財団第2回作品賞入選：「ドーリアン」。現代の音楽展81にて初演。NHK交響楽団尾高賞三十周年記念コンサートにて再演。ユネスコ国際現代作曲家会議(IMC)入選：「チカプ」。1984、個展「魚座の音楽展」横浜にて開催。西村朗と「世紀末音楽研究所」設立。1985、ギター協奏曲「天馬効果」初演。文化庁舞台芸術創作奨励賞。1986、日本フィル・シリーズ第31作「鳥たちの時代」初演。「天馬効果」第24回レコード・アカデミー賞日本人作品部門賞受賞。1987、「魚座の音楽論」音楽之友社より出版。第8回草津国際夏期音楽フェスティバル招待作曲家。

現在、鳥／神話の動物／星／天使／人間などのシリーズを進行中。

■和田 薫

1962年山口県に生れる。17歳から、作曲を独学で勉強する。処女作が、全国学芸コンクールに入選し、その後東京音楽大学へと進学。作曲を伊福部昭、有馬礼子、池野成の各氏に、指揮を汐沢安彦氏に師事する。在学中、学芸コンクール1位、海上自衛隊記念コンクール入選、交響楽振興財団作曲賞入選、さらに全国吹奏楽コンクールに作品が選ばれる。1985年同大学作曲科を首席で卒業、同年、尾高忠明指揮東京フィルハーモニックオーケストラにより〈オーケストラのためのメタモルフィック・ムーブメント〉が初演される。

1986年より、アムステルダムを中心に欧米活動を始める。同年、オランダにおいて〈オーケストラのための三つの断章〉を世界初演。翌1987年、アムステルダム・フィルハーモニック・オーケストラにより同作を再演。〈フルート、ハープ、打楽器のための相掛〉が、ニューヨークでおこなわれた国際現代作曲家コンクールに入選。1988年、〈オーケストラのための民舞組曲〉がスウェーデンで世界初演され、その後スウェーデン、オランダ各地で再演される。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現する
ために、楽器の本質を追求した箏



オリジナル立奏台

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(792)8481



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25

オリオンシャトー1F

PHONE. 03-397-2292

本日発売!!

— 500円 —

〈アメリカ公演のすべてがわかる〉

邦楽現代 ~20号~

日本音楽集団機関誌

◇対談

平井 澄子
田村 拓男

他

◇特別寄稿

田辺 秀雄

◇特集

アメリカ公演報告

◇巻頭言

岡本文弥